

第5回教育セミナー 実績報告書

開催日時：平成28年7月3日(日) 13:00～16:35

会場：日比谷コンベンションホール(千代田区日比谷公園)

1. 開会式



<理事長挨拶>(以下、要旨)

コミュニケーションが苦手な子どもたちって、本当にいるのでしょうか。通常の方法とは違うかもしれないけれど、何かを伝えようとしている子どもたちがいて、その子どもたちからの目に見えないコミュニケーションを受け取ることが苦手な大人たちがいるだけだとも言えないのでしょうか。本当にコミュニケーションが苦手な子どもたちなんて、実はいないのではないのでしょうか。

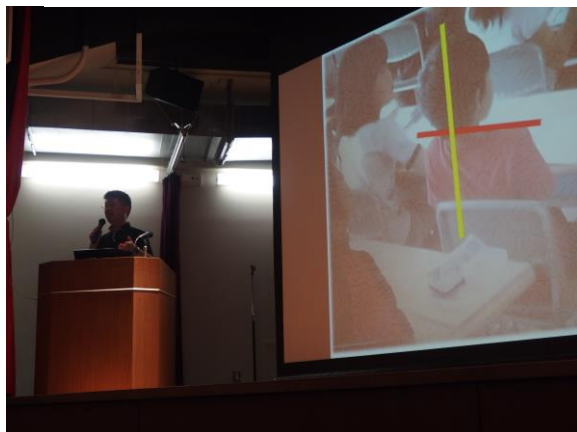
コミュニケーションとは、心と心が通じ合うことだと思います。私たちには、目に見えないコミュニケーション能力があるとされています。だからこそ、私たち大人は、子ども一人ひとりを分け隔てることなく、向き合う必要がある。そのことを皆様と共有したいと思います。

2. 【基調講演①】通常学級における特別支援教育のあり方

講師：大石幸二 立教大学現代心理学部教授

全ての子どもたちが教育的ニーズをもっていて、その中の一部の児童は、個に応じたきめ細かな手だてを尽くすことによって、よりよく伸びることができます。そのときに少し意識化してあげたほうがよいと思います。先生が言語化されたら、支援の質が高まります。

また、先生方が日ごろ見取っておられる児童の姿勢や体の動かし方、目の動き方、聞くときの構えや呼吸がどうかということは、たいへん大きな意味をもちます。一人ひとりの子どもたちの特質を理解すると、それを元手にして子どもたちの動きが全体として把握されて、何を仕掛ければどういう結果が現れるかということ、予測できるようになってくるからです。

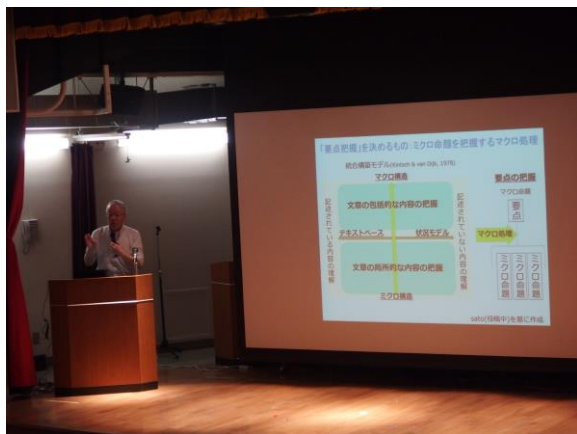


いわゆる行動上の問題は、コミュニケーションの働きがあると言われています。児童が先生や友達に受け入れられたり承認されたりする場の中におかれることで、行動上の問題が減弱するということがわかっています。行動上の問題がエスカレートしてしまう場合、子どもたちがコミュニケーションから遠ざけられていることがあるかもしれないと思っています。

特別支援の視点は、全ての子どもたちを大切にするという大きく教育を転換する契機になるのですが、そのためには、もっと先生方一人ひとりのよい実践が意味づけられて評価され、やっていることの価値に気づけるようにし、それらが学校全体で共有されている必要があると思います。

3. 【基調講演②】 コミュニケーションが苦手な児童への読み書き支援

講師：小池敏英 東京学芸大学特別支援教育教授



読み書き困難の児童には、いくつかの課題が見られます。長い単語を読み詰まる、特殊音節の単語が読み詰まる、そして漢字単語が読めないという3つです。当然こういう児童の場合は、学習性無力感がおき、いくら努力してもできないということで生活全体に力が入らない様子も伺い知ることができます。

今日提案したいのは、文章中に出てくる単語を目に馴染んだ状態にすれば、その文章は読みやすくなります。具体的トレーニングは「言葉探し」です。教科書に出てくる言葉(単語)を無意味語の羅列の中から探すという課題や、その言葉の「穴埋め(単語完成)クイズ」をすることです。同様に漢字も、完成課題や検索課題を行うと、改善の様子が見られてきます。

スマイル・プラネットは、教科書準拠の「スマイル式プレ漢字プリント」を Web サイトで提供しています。光村と東書(これは近々)までは対応しています。学年・単元を選んでもらうと、その単元で学習するひらがな単語の検索課題や漢字単語の穴埋めクイズや検索クイズのプリントが出てきます。自動生成しているので提出される漢字の位置が変わるので、繰り返してもチャレンジできる課題になります。これをやると、少なくともこれらの単語について馴染んできますので、その単語が入っている文章は読みやすくなります。これを1週間に3回やり、それを3週間実施すると、できるようになったという実感が出てくると思います。児童にとってこの単語を読むトレーニングは、文章を読むというトレーニングよりずっと楽です。このトレーニングは有効だと思います。



4. 【基調講演③】 対人認知に弱さをもつ児童に対する支援

講師：藤野博 東京学芸大学特別支援教育教授



自閉症スペクトラム(ASD)には、基本的な認知の特徴があるという研究があります。それは、「実行機能の問題」、「中枢性統合の弱さ」、「心の理論の障害」という3つです。実行機能というのは簡単に言うと行動を計画することの問題、中枢性統合というのは、「木を見て森を見ない」といいますが、細かいところには目がいくが、全体を包括的統合的に捉えるのが難しいという問題、心の理論というのは、相手の気持ちや感情、視点を理解することが難しいという問題です。

それぞれの特徴に対して支援のポイントがあります。実行機能に対しては、活動の流れに対する見通しが持てるように援助するというです。中枢性統合には生活環境や学習環境をシンプルにすることです。心の理論には、目に見えないものを視覚化してあげるということです。

目に見えないものを視覚化する際、具体的な手法を2つ紹介します。1つは「ソーシャルストーリー」といって、簡単なお話にして社会的場面を説明してあげるといふものです。もう1つは「コミック会話」といって、起こった状況を吹き出しの会話形式にして客観的に絵入りの図解をして考えさせるというものです。

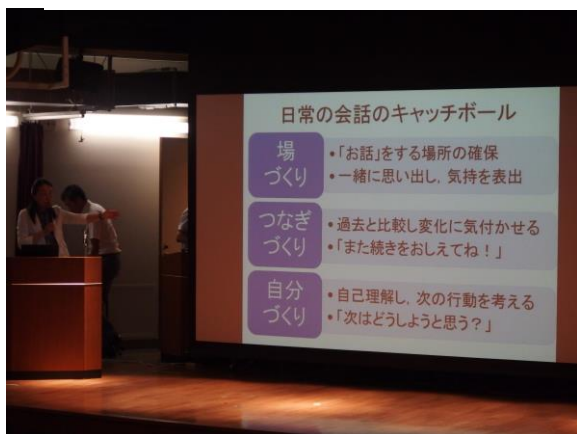
いずれの支援をする場合も、先生と児童のコミュニケーションが大事です。先生は自分のことを基本的には認めてくれているというベースがあって、はじめてツールが生きてきます。また、対人認知に困難を抱える子どもへのサポートが日常的に提供される環境作りもとても大切です。



5. 【基調講演④】すべての児童の学校適応に役立つ学校づくり

講師：西山久子 福岡教育大学教職大学院教授

学校では、ニーズのある児童が多く認知され、ニーズも多様になり、さらに、ベテラン先生の退職などの課題があります。そんな中で先生方は日々、“気になる児童”の支援をされていますが、一人ひとりの先生によって気になり方や気になり始める時期が違ってきます。そのあたりは整理して対応していく必要があると思います。まず、深刻さの度合を1～3の段階に分けてみるとよいと思います。もう1つ、児童の見方について領域を分けて捉えることです。一例を示すと、「学習面」「心理社会面」「進路面」「健康面」の4領域に分類する方法です。このように整理して分析的に捉え、校内で目線を揃えて共通理解していくと、チームでの援助に有効だと思います。



キャリア・カウンセリングはカウンセリングの1つですが、治療的なアプローチではなく、より開発的に将来の目標設定につながることで、目標達成の障壁の克服などのような視点に目を向け、解決思考で児童に関われるのがよいところです。

最後に、ニーズのある児童に育みたい力を整理してみました。まず自己理解をして、自分の強みを使っていけるようにする。それから、自分に役立つ自助資源の理解をする。そして将来的には自分で自分を助けることができるようになってもらう。そうすることで、何卒になっても成長し続ける大人を世の中に送り出せます。小学校でのキャリア・カウンセリングをふまえた関わりは、その基盤になってくると思います。

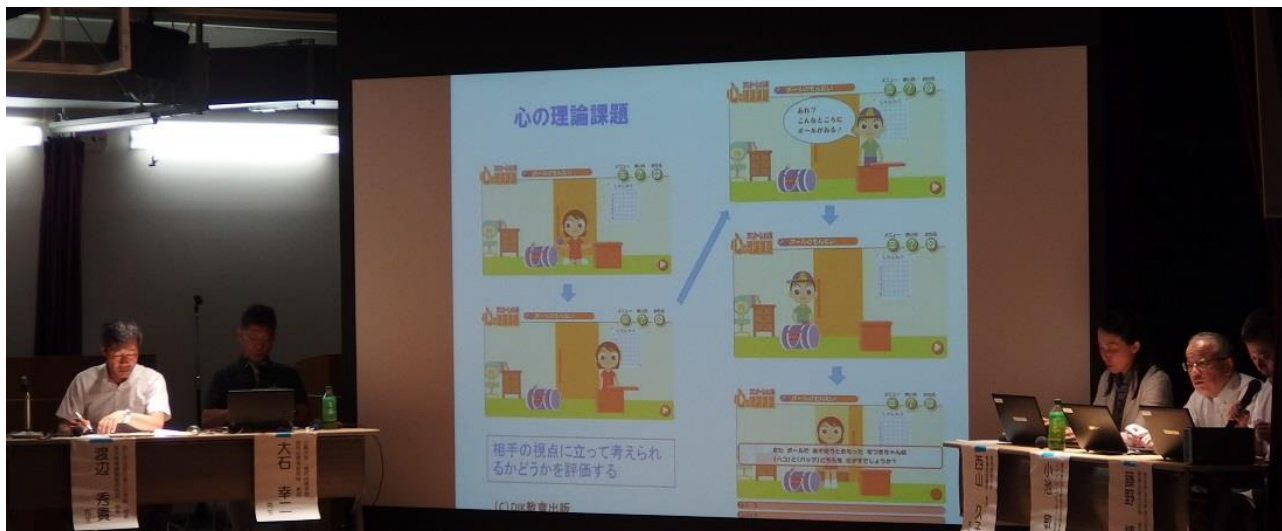
<会場全体の様子>⇒



6. 【シンポジウム】 基調講演を聞いた参会者の質問紙への回答

司会：渡辺秀貴 狛江市立狛江第三小学校校長 東京都公立学校情緒障害研究会会長

シンポジスト：大石幸二，小池敏英，藤野博，西山久子



司会：まず、各先生方にいただいた質問紙からある程度共通する質問について、各講師の先生に選んでいただいております。

大石：先生方の専門性を向上させるためにどのような手法があるかという点についてお答えします。いちばん大切なことは先生方の指導行動が変わらなければならないと考えています。その際の留意点として、新しい技法やアイデアをお伝えするのではなく、現時点で先生方がうまくできているけど自覚していない、成功的な実践なのに本人が認識していない「既存のスキル」を発掘しそれを補強・広めることを目指します。もう1つ重要なことはフィードバックです。実践者のふり返りに準拠しながら、フィードバックを言語化することです。



西山：“気になること”をキャッチするツールについてお答えします。クラスの気になることの短冊を書き出して、それを領域に分けチェック表を作ります。縦軸はクラスの児童、横軸に領域別気になることの表です。これを複数の先生(担任+1名程度)で年間に3回くらい実施します。慣れてくると1クラス分やるのに10分程度でできます。前は数が0だった児童のチェックが、今回は二人の先生とも3や4になっていたりすると、その児童には何か変化があったということです。そういう児童には優先順位をつけて声がけてみると効果がある可能性が高いです。

小池：ワーキングメモリー(WM)に課題のある児童にはどう支援するかということについてです。WMの弱い児童は型通りの反復をしてもなかなか定着が弱いです。効果が見込める手法は、自分の知っていることと関係づけて学習させるという方法です。また、児童が知っていることの代表的なものは絵です。その人の知っている知識を利用しながら絵を理解します。ですから、単語の意味を表す絵と併せて学習をすると、その単語の定着に効果があります。





藤野：心の理論に関するものが複数あったので、関連づけながらお応えします。まず、アセスメントですが、心の理論課題というのがあります。私どもが作成したソフトウェアに全部で5課題あり、これである程度のどういう水準の心の理論がどのくらい理解できるかということの評価することはできません。それで、どういう条件が心の理論の獲得を可能にするかということ、決め手は「言語力」だということが分かってきました。だいたい9才くらいの言語力があると、こういった心の理論の課題は解けるようになってきます。大人のASDの方には知的な仕事をされている人もいますが、本や小説でいろんな心の機微を学んだと仰います。読書体験が効果的だということです。

司会：講師の先生方それぞれお応えいただきありがとうございました。

さて、ご質問の中に多くの学級担任が1年生から宿題で音読・漢字を出します。音読だったら何ページから何ページまでを何回とか、漢字だったら何文字何回ずつとか、これを一律に課す方が主流かと思います。これについてご意見のある先生がいらっしゃいましたら伺ってみたいということです。



小池：特に小学校1～2年生のときに、文章を読むことがまだハードルが高い児童にその課題を課すということは、辛い部分があり学習性無力感を引き起こしてきますので、そういう意味では文章を読むだけという選択だけでなく、単語を読む練習と文章を読む練習を抱き合わせて課すというのが1つの手だと思います。場合によっては文章を読むのが5回のうち1回で良いことにし、あとは単語を読む練習をさせるというようにです。結局、単語に馴染んでくる、単語を短時間で読むということがとても大事なことで、そう切り替えるのが1つのアイデアかと思います。

大石：音読は、音読なので聞き手がいなくて無意味なのです。つまり教師が作為的にやるのであれば、いいと思います。頷きながら聞き手がちゃんと聞いてくれるような状況で、文字を音声として表出するという音読と、社会的な場において言語を表出し聞き手がそれをキャッチするという音読と、教師のねらいをどこに置かれてその宿題が出されているのか、ここが大変大事なのではないかと思います。ですから、あまりルーティーンとして先輩がそういう宿題の出し方をしているからという前に、1つ検討した上で、それを何に結びつけたのかということが問われるかなと私個人は思っています。





司会：学校現場では教職年数の浅い先生方が増えています。そうすると1つ1つの指示や教育活動の意味を立ち返って、今こういう意味があるからこういう行事があるんだとか、こういう活動をするとかこういう宿題を出す、出し方もこういうふうに工夫するんだということを、共有する時間もないままに、模倣的に先輩たちがやっているからとか学年主任が言っているから、だから今やるという形になっているかと思います。原点は何のために、それは子どもにとってどういう意味があるのかということ、私たちが発信する教育指示・指導については、問い直していく必要があると思います。

それでは最後の課題で、大学生に特別支援に関する知識やスキル等を身につけさせて現場に送り出してほしいという問いに対するお応えをいただきたいと思います。

藤野：どの大学も障害学生の支援の部門ができています。私どもの東京学芸大学も障害学生支援室という名前の部署があって、障害をもつ大学生のサポートをしています。そこに多くのボランティア学生たちが登録してくれています。通り一遍の知識ではなくて、そういう中に学生たちを巻き込んで、いろんな障害や困難を抱えたクラスメイトに対して、身近にサポートするという経験が、すごく教育効果があると思っています。クラスメイトの中で、さりげないナチュラルなサポート・気遣いをするという習慣が身につくかどうかが大さかと思っています。



西山：「実践の往還」という言葉がよく使われるようになりました。特別支援教育に関しての学問的理解をするという範囲の中で留まるのではなくて、実際現場で見てきたことを戻って考えるといったような、行ったり来たりということをしていかないとなかなか腹落ちしないことがあります。また、教育実習のモチ方を工夫するといったことで、少しでも現場の先生の声“皆さんこういうことを身につけておいた方がよいですよ”と言った助言が個別に1対5とか1対3とかという単位で聞けるような仕組みも入れていくといいかと思ったりしています。

司会：「チーム学校」というようなことも言われていて、他職の専門性を学校にも仲間として入れていって、いろんな教育課題に対応していこうという時代になってきている中で、大学生のときから、学校は閉じられた教育機関というイメージではなくて、“様々な課題には様々な専門職の方と連携して、学校というのは運営・経営されているものなのだ”ということを、学生時代から知識としても示し経験としても積んでもらえるようなことができれば、今の環境はさらによくなっていくのだろうなと思いました。

今回のテーマはコミュニケーションに困難な課題をもつ児童が生き生きと学校生活を送るためにはということで、4人のご専門の先生方から大変多岐にわたるよいお話が伺えたかと思っています。会場の皆様からもたくさんのご意見ご質問をいただき、60分という短い時間でしかた可能限り、ご回答させていただいたつもりです。不十分なところはスマイル・プラネットのWebサイトなどで回答していきたいと思うので、そちらをご覧くださいければと思います。

